方向

第一四五号　一九九二年六月一日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

光を放つ

―法華経巡礼　73―

1992 5 14　原田憲雄

05-08. 小さな小さな薬草も、小さなのも、この世界には、
中ぐらいのも、大きな薬草もある、聞きなさい、それら一切を説明しよう。（28）
汚れのない法を知り、涅槃に達している人たち、
六神通や三能力をもつ人たち、それらが小さな薬草といわれる。（29）
山岳や渓谷に住み、おのおの独りで覚ることを熱望し、
このように中ば清浄にされた覚りをもつ人たちが、中くらいの薬草といわれる。（30）
人間の雄牛になろうと願い、「人と神の保護者である仏になろう」と、
精進と禅定をおこなう人たち、かれらが無上の薬草といわれる。（31）
努めるスガタの子らで、慈愛と寂静の修行をおこない、
人間の雄牛たることに疑いのなくなった、こんな人たちが大樹といわれる。（32）
不退転の法輪を転じ、神力あり、勇猛で、
幾千万多数の人間を解脱させる人たち、それが巨木といわれる。（33）

平等に、法を、ジナは説く、雲が雨を平等に降らせるように、
しかもその神通はさまざまである、大地に茂る薬草のように。（３４）
この譬喩の示すところによって、如来の方便を知るがよい、
一つの法にもさまざまの解釈があること、飛沫のようなものであると。（３５）
わたしもまた、法の雨を降らせ、世界はこれによって満足し、
それぞれの力に応じて思量する、よく説かれた一味の法を。（３６）
植物は、潅木であれ、中くらいの薬草であれ、雨が降れば、
大樹であれ、巨木であれ、十方の一切が、光り輝くように、（３７）
つねに世界を幸福にするこの法は、この一切の世界を法によって満足させ、
満足した一切の世界は解脱する、薬草が花を咲かせるように。（３８）
中くらいの薬草として成長するのは、汚れのない境地に住むアラカンたち、
森林で修行する独覚たちで、かれらはこのよく説かれた法を実現する。（３９）
多くのボサツたちは記憶力つよく、考え深く、三界の一切に精通し、
この無上道を求めていて、大樹のように成長する、つねに。（４０）
神通力をもち、四禅定を行ない、空性を聞いて歓喜を生じ、
幾千の光を放つ、その人々こそ、ここで巨木といわれるのだ。（４１）

このように、カーシャパよ、法を説くことは、雲が平等に降らせた雨のようなもの。
それによって多くの薬草が成長するように、人間の花も、かぎりなく。（42）
わたしは自ら証した法を明らかにし、機会をみて仏の菩提を説きあかす。
これがわたしの無上の巧妙な方便であり、一切の世界の導師たちのもの。（43）
すぐれた真理をわたしは如実にこう説くのだ「すべての声聞は涅槃に入ったのではなく、
最善の菩提への修行をして、これらの声聞たちも、やがて仏となるだろう」と。（44）

kṣudrānukṣudrā ima oṣadhīyO kṣudrīka etā iha yāva (W:yā ca) loke /
anyā ca madhyā mahatī ca oṣadhī śṛṇotha tāḥ sarva prakāśayiṣye //28//
anāsravaṃ dharma prajānamānā nirvāṇa-prāptā viharanti ye narāḥ /
ṣaḍ-abhijña-traividya bhavanti ye ca sā kṣudrikā oṣadhi saṃpravuttā //29//
giri-kandareṣu (W:kandareṣū) viharanti ye ca pratyeka-bodhiṃ spṛhayanti ye narāḥ /
ye īdṛśa madhya-viśuddha-buddhayaḥ sā madhyamā oṣadhi saṃpravuttā //30//
ye prārthayante puruṣa-ṛṣabhatvaṃ buddho bhaviṣye nara-deva-nāthaḥ /
vīryaṃ ca dhyānaṃ ca niṣevamāṇāḥ sā oṣādhī agra iyaṃ pravuccati //31//
ye cāpi yuktaḥ (W:cābhiyuktaḥ) sugatasya putrā maitrīṃ niṣevant'iha śānta-caryām /
niṣkāṅkṣa-prāptā puruṣa-ṛṣabhatve ayaṃ drumo vucyati eva-rūpāḥ //32//

avivarti-cakraṃ hi pravartayantā ṛddhī-balasmin sthita ye ca dhīrāḥ /
pramocayanto bahu-prāṇi-koṭī mahā-drumo so ca pravuccate hi //33//
samaś ca so dharma jinena bhāṣito meghena vā vāri samaṃ pramuktam /
citrā abhijñā ima eva-rūpā yathauṣadhīyo dharaṇī-tala-sthāḥ //34//
anena dṛṣṭānta-nidarśanena upāyu jānāhi tathāgatasya /
yathā ca so bhāṣati eka-dharmaṃ nānā-nirktī jala-bindavo vā //35//
mamāpi co varṣatu dharma-varṣaṃ loko hy ayaṃ tarpitu bhoti sarvaḥ /
yathā-balaṃ cānuvicintayanti subhāṣitaṃ eka-rasaṃ pi dharmam //36//
tṛṇa-gulmakā vā yatha varṣamāṇe madhyā pi vā oṣadhyo yathaiva /
drumā pi vā te ca mahā-drumā vā yatha śobhayante daśa-dikṣu sarve //37//
iyaṃ sadā loka-hitāya dharmatā tarpeti dharmeṇ 'imu sarva-lokam /
saṃtarpitaś cāpy atha sarva-lokaḥ pramuñcate oṣadhi puṣpakāṇi //38//
madhyāpi ca (W:madhyāṇi co) oṣadhyo vivardhayī arhanta ye te sthita āsrava-kṣaye /
pratyekabuddhā vana-ṣaṇḍa-cāriṇo niṣpādayī dharmam imaṃ subhāṣitam //39//
bahu-bodhisattvāḥ smṛtimanta dhīrāḥ sarvatra traidhātuki ye gatiṃ-gatāḥ /
paryeṣamāṇā imam agra-bodhiṃ drumā va vardhanti te (W:ti) nitya-kālam //40//

ya ṛddhimantaś ca tu dhyāna-dhyāyino ye śūnyatāṃ śrutva janenti prītim /
raśmī-sahasrāṇi pramuñcamānās te caiva vuccanti mahā-drumā iha //41//
etādṛśī kāśyapa dharma-deśanā meghena vā vāri samaṃ pramuktam /
yehī(W:bahvi) vivardhanti mahauṣadhīyo manuṣya-puṣpāṇi anantakāni //42//
svapratyayaṃ dharma prakāśayāmi kālena darśemi ca buddha-bodhim /
upāya-kauśalyu mamaitad agraṃ sarveṣa co loka-vināyakānāṃ //43//
paramārtha eṣā mama(W:evaṃ maya) bhūta bhāṣitā(W:bhāṣito) ye(W:te) śrāvakāḥ sarvi ta(W:na)
enti nirvṛtim /
caranti ete vara-bodhi-cārikāṃ buddhā bhaviṣyant'imi sarva-śrāvakāḥ //44//

「神通（じんづう）」とは人並みを超えた智慧のことで、仏やボサツなどが持つとされる。どこにでも自由に行ける「神足通（じんそくつう）」、死後の世界を見通す「天眼通（てんげんつう）」、一切の言語・音声を聞きうる「天耳通（てんにつう）」、他人の心を知りうる「他心通（たしんつう）」、前世を知る「宿命通（しゅくみょうつう）」、煩悩の無くなったことを知りうる「漏尽通（ろじんづう）」、の六つを「六神通」ということは本稿17「記憶」で述べた。このうち「天眼通」「宿命通」「漏尽通」の三つを「三明（さんみょう）」といい、わたしは「三能力」と訳しておいた。「明」とは、学問とか知識という意。学問や知識を正しく集積し組織することによって、常識では知ることも判断することもできない事態が見えてくるのである。世間で「超能力」

などといって騒ぐ「神秘的な能力」のなかには、手品のように神秘的でないものもある。それらもしいていえば神通の一種に違いないが、低級なものである。ここでいう「六神通」や「三能力」は高級なものではあるが、それを持つ人たちが『法華経』では「小さな薬草」とよばれていることに注意すべきであろう。

インドで牛が神聖な動物とされること、今日ではたれもが知っている。「人間の雄牛」とは「人間中のもっともすぐれた神聖なるもの」の意。「四禅定」とは精神統一の四つの段階をいう。

さて、ここで、妙本、即ちクマーラジーヴァの訳した『妙法蓮華経』の、「薬草喩品」は終る。ところが梵本の多くの本にも、妙本より早く漢訳された正本、すなわちダルマラクシャ（竺法護）の『正法華経』にも、添本、すなわち妙本より遅れてジュニャーナグプタ（闍那崛多）らに翻訳された『添品法華経』にも、「薬草喩品」はなお続いている。このことについては、妙本のテキストが『法華経』の梵本のうちたぶん最も古く、最古のその本では「薬草喩品」はここで終っていた。あとに続く部分は後に成立し、その部分のあるテキストは妙本のテキストより新しいものだろう、といわれ、これがほぼ定説となっている。

妙本を尊重する立場からすれば、以下ははぶいてもよいのだが、道草をきらわぬこの巡礼、やはり一々文々にたどってゆくことにしよう。

※前号正誤　一頁　一行　下町者町　→　下長者町

二四頁　一五行　処罰されのが　→　処罰されるのが

御蔭山

1992 05 18　　原田慶

一昨年だったか初めて訪ねた時、山はひっそりと静まりかえって、小鳥の声と、木の枝の鳴るピシピシという音だけが響いていた。山の中の神社は陽ざしも明るく、若葉の緑もさわやかな初夏の風景なのに、一人でいるのが何となく恐しくて、ほんのしばらくで山を下りてしまった。もうすこし長くそこにいて山の静けさをじっと聞いていたかった。いつかもう一度行かなければならないと思っていたが、それには御蔭祭の日がいちばんよいのではないだろうか。

毎年五月十五日の葵祭の前の十二日、下鴨神社に荒魂を迎えるために、御蔭神社へ使者が送られる。男の人ばかりの行列だけれど山での神事も見ることができると聞いていた。上賀茂神社ではこの日、夜の闇の中で御阿礼という神事が行われるそうで見ることはできない。山から神社へ神を迎える儀式は秘密にされるものだし、そういうことを強いて見たいと思うわけではない。ただ神が降臨されたと伝えられて千数百年もずっと守られてきた山の、不思議な静けさをゆっくりと感じてみたいと思っただけだった。

今年の五月十二日は晴れて明るい日になった。十時三十分を過ぎた頃、山に着いてみると、神社の使いの人々は、行列を整えて山に上ろうとしているところだった。狩衣や直垂に烏帽子をつけた人や、八瀬の童子らしい白装束の人々がゆっくりと歩き出したが、他には人影がないから、やはり秘儀で、上まで行ってはいけないのかもしれないと思いながら少し離れてそっとついて行った。赤い鳥居をくぐって急な坂道を進んで行くと、小高い山

上の御蔭神社のあたりが見えてきた。見上げると、上にはビデオカメラを廻す人や行列を見下ろしてカメラをかまえる人などがあって、おそるおそるそっとついてきたわたしは、異変が起こったような、がっかりするような気分だったが、上まで来てみるとそんなにたくさんの人ではなかった。三十人くらいだったのだろうか、その中に、報道関係の撮影班が二組あって、熱心に取材している。他の人達も皆カメラを持っている。神殿に一礼してからせまい台地を見ると、まわりに空と白い雲を写したような太い横縞の幔幕が張りめぐらされ、神殿の正面、台地のぎりぎりまで離れた位置に少し高くなった座がこしらえてあって、雅楽の人が並んでいた。笙、ひちりき、横笛、大鼓の四人が座り、笙の人は、コンロの火で楽器を温めている。いつもそうするのだろうか。今日はひんやりした晴天だった。木陰にいるわたし達の足もとは少し湿って、黒い土に苔が生えているが、そんなにじめじめするほどではない。しゃがんでいると山土の香が強すぎるほどだった。祭の人々はみんな座っているので、見るのもしゃがんでいる方が同じ高さになることができたし、山をずっとよく感じることができた。烏帽子姿の人達が、社殿の中へ入ると儀式が始まったらしい。小さな門のような入り口は黒のふちどりに赤黄緑白の縦縞の幔幕が閉ざされ、右大臣と左大臣のような二人が押さえている。この儀式は秘密なので何も見えないが、雅楽の演奏が始まった。横笛だけが先に奏されていたが、そのうちに笙、ひちりき、大鼓がいっせいに合奏され、音が賑やかになった。雅楽を聞きながらこの山にかがまって、はるか比叡山まで連なる山々の気配を感じていられるのは、この上ない贅沢である。その間、見物の人は何か話しているようだったが、カメラの人は黙々としているし、全体として人数が少ないから、山の静けさのさまたげにはならない。

時計は見なかつたけれど、一時間ちかくたったのではないだろうか、楽の音が止んだ。その頃になって、赤いスーツのひとが見物に上がって来て、人々がざわざわした。そのひとは東京かどこかから新幹線で京都に着いて、すぐタクシーに乗って今、やっとここへ着いたと言ったので、まあよう来はったなあと、みんな感嘆したためである。どうしても一度見たいと思っていたが、やっと来ることができたといい、雅楽のことなどいろいろたずねているらしかった。親切な人が、

「あっちへ行ってたずねはったらよろしいんや、せっかく遠いところからわざわざ来はったのに、遠慮せんかてよろしいで」

と言って自分で雅楽の人の方へ近づき、何かたずねながら烏帽子をのぞいていたが、引き返して来て、挿しているのがカツラの枝であること、葵はしおれると目立たないのでカツラの方がきれいだとか、細いナイロンの紐でくくりつけてあることなどを説明していた。使者の行列が帰る途中の路次祭のこともたずねたらしくて、他の人が、地図を渡し、

「これをあげますわ、簡単な京都の地図です、帰りに赤の宮へ寄らはりますさかい、電車に乗って、三宅八幡で降りてそこから歩かはったらよろしい」

と教えている。御蔭祭の儀式が終ってから来たひとにみんな親切だった。

空色の幔幕が風にまくれ上ったりして、しばらく間があいたが、中の儀式が終ったようで、雅楽の人が揃って礼拝すると入り口の幕が揚げられ十人ほどが出て来た。これですべてが終り、静かな祭であった。

これからは、帰途につく前の食事になるらしくて、地元のひとらしい世話人さんが、役を終った人に弁当の折を配っている。見物は、一つの女性サークルの仲間らしいのがほとんどで、他の人の中に外国人の男性が二人いて、サークルのリーダーの人から何かの資料らしい雑誌を何冊かもらって、「いいんですか、どうも有難うございます」など日本語で話している。サークルの人はビニールの敷物を広げて昼食にするらしかった。外国の人にも一緒にどうかと声をかけて、お弁当屋さんの三角のおにぎりをどっさりと袋に入れているのを見せている。このひと達はお祭研究会か、京都の歴史などを読む会を開いているように見えた。あとは老夫婦らしい人が何組かあった。

わたしは、人々にまぎれこんで、この山の静けさを十分に楽しむことができたので、山を下りることにした。わたしを追い抜いて、男の人が足早に下って行ったが、後から、ふだん着のおばあさんが下りて来たので、鳥居のあたりでその人を待って、

「こんにちわ、今日はよいお天気でよかったですね」

と声をかけた。

「ほんまになあ、ちょっと寒いぐらいやけど」

「近くの方ですか」

「うんそうや、ついそこやけど。こんなとこめったに来いひんさかい、行く時はこわかったわ、誰もいはらへんしなあ、気持わるかった。ふだんは誰も行かへんとこや」

「そうですか、ほんまに静かですね、わたしこのまえ一人で行った時は、誰もいはらへんしこわかったですわ。神社の人はこれから赤の宮へ行くて言うてはったけど遠いんですか」

「バスで行ったらええにゃ、バスは赤の宮の前で止まるわ。降りたらすぐそこがお宮さんや。さっきの人は、電車で行くとか教えてはったけど、電車なんて降りてからようけ歩かんならんのに遠い遠い、バスで行ったら前で止まるのに」

新幹線で来た人のことはみんな知っていたのだけれど、親切に言っている人があったので、おばあさんは口出しができなかったらしい。人々が赤の宮へ着くまでに二時間近くもあったので、わたしはまっすぐ家に帰ることにした。

「寂しい祭やな、ここを行列が通らはったかて誰一人表にも出てはらへん、見る人あらへんな」

とおばあさんは言い、道に出ていた小さな犬を、

「これこれ、あぶないで、中へ入り、帰らなあかん」

とすぐ傍の家へ追い込んだ。

「ここは自動車で通らはるだけですものね、下鴨神社へ帰ったら切芝の神事ていうて、雅楽にあわしてきれいに舞わはります。あれはほんまにきれいやと思いますわ」

「下鴨神社へ帰らはるのか、上賀茂かと思てた。そこでそんなにきれいに舞わはるて何時頃行ったら見られますのや」

「さっき神社で、今日は四時頃て言うてはりましたけど、もっと早い時もあります。三時頃に行っといたら確かに見られますわ」

「そうか、そんなんちょっとも知らんてたわ」

バスの乗り場までの道順を、わたしにくわしく教えてから、おばあさんは、「わたしとこ、ここやにゃわ」と言って、新しい二階家の戸を開け、ちょっと振り向いて、わたしの方へ会釈して入って行った。

こんなに御蔭山のすぐ近くの人でも、神霊のことや、祭礼のことについてよく知らないのは、以前には秘儀として、人々の目にすることは許されていなかったのかもしれない。この日でも、神社まで行っていた人はかなり限られた人だった。山の神の荒魂は下鴨神社に迎えられ、。奉仕する人々によってなだめ崇められて、すべての人の守護神になってくださる。神様も、信じ受け入れて祈る人に出あった時、いっそう強い力を現わされるのだろう。わたし達の日常でも、いつわりのない心が通じ合ったとき、不思議な力が生まれることがある。その力が神なのかもしれない。

教えられた道を歩いていると、郊外らしくどの家もゆったりとしていて、前庭に畑を作っている家もある。石垣の間からトカゲが身を乗り出して外を眺めているのに出会って、思わず立ち止まったりしながら、かなり長く歩いて電車の三宅八幡駅に出た。バスの停留所も近くにあるので、どちらにしようかと考えていたら、ちょうど線路の警報機が鳴り出して、電車の来る音がする。やはり赤の宮は次の機会にしようと思って電車に乗って出町柳に着いた。ほっとして、今日はいい日だったと思ったので、小さなケーキを二つ買って帰ってきた。

山水詩

（中国の詩人と仏教　二二）　1992 05 25　原田憲雄・

謝霊運が廬山の慧遠に会ったのが四一一年だとすると、霊運は二十七歳、慧遠は七十八歳でした。霊運にとっては祖父ほどの高齢です。しかし壮者を凌ぐ元気な人でした。清浄な高僧として国の内外に知られただけでなく、帝位をねらう桓玄のような権力に屈せず、皇帝を迎えるためにも山を下りませんでした。こういうことは、門閥を誇り、おのれの才能に傲りながら、世間の目が気になってならない三十前後の男には、驚異なのです。噂にきいて畏れをさえ感じていたのに、会ってみると率直淡白で、知らないことは孫のような少年にも礼を尽くして尋ねるのですから、子供のころから孤独だった霊運には、懐かしく、慕わしかったに違いありません。かれはきっと暇を見つけては廬山を訪ね、写せるかぎりの慧遠の著作は写させて手許におき、繰り返し読んだことでしょう。そのなかに廬山諸記や詩、また諸道人の「石門に遊ぶ詩」などが入っていたことは疑いありません。慧遠を理解し、対話をかわすためには、かれが読んだと察せられる仏教の経典や注釈・論書にも目をさらしたはずです。

霊運が江州にいたのは一年ほどで、四一二年にはかれの仕える劉毅が、対立する劉裕の軍にやぶれて自殺し、霊運は劉毅に殉ずることもできず、かえって劉裕の部下とされ、都の建康に帰ります。そのような複雑悲愴な心境にある霊運に「仏影銘」の委嘱があったことは、慧遠のあたたかい慰問と感ぜられたことでしょう。四一六あるいは七年には、その慧遠が示寂します。八十三あるいは四歳でした。霊運は、追悼の「廬山慧遠法師の誄（るい）」を書いています。なかで、

わたしは《学ニ志ス》年に、法師の門人の末座にと希望したが、残念なことには誓願を遂げないうちに、この世での永がのお別れになってしまった。

といっているのです。《学ニ志ス》はいうまでもなく『論語』にもとづき十五歳をさします。霊運のその年は、養われた銭唐の道士の家から建康の都の家庭に帰り、一族の伯叔父や従兄弟たちに交じって楽しく暮らし、「性は奢豪にして車服鮮麗」、叔父の一人から「名家の品格」があるとほめられながらも「広くはあるが締まりがないね」と批評されたころ。はたして誅にいうような殊勝な心だったかはわかりませんが、慧遠の名声がすでに都にとどろいていたことは事実で、王家や謝家の人たちの談話にもたびたびその名が上がったでしょうから、会ってみたいと思って不思議はなく、そのときの敬慕の心に慧遠が亡くなった直後の悲しみを投影すればあのような言葉になったのでしょう。残念がる気持に偽りはありますまい。ただ、「門人の末座」を「白蓮社に入る」ことをただちに結びつけるのはどうでしょうか。白蓮社が慧遠によって作られたため、慧遠というと白蓮社が思い浮かび、「残念なことに誓願を遂げないうちに」という誅の言葉から、慧遠は謝霊運を危うがって白蓮社への加入を拒んだ、といった伝説ができあがり、それが兼好の『徒然草』に持ち込まれるのです。霊運は慧遠に傾倒しましたが、だからといってすでに白蓮社にはいっている人達まで尊重し、かれらのすべてと仲よくやってゆくような穏かな男ではありません。慧遠の愛情を独占してしまいたいのです。白蓮社の人たちは、慧遠が拒まないからそっとしてはいても、やって来てその日からかれらの師を自分ひとりの先生みたいにふるまうのを、苦々しく眺めていたのではないでしょうか。『徒然草』の記事は事実としては誤っていても、謝霊運の人物の危うさを伝え

る点では生動しています。

慧遠が霊運に手を取って仏教学を教えたかどうかはわかりません。慧遠の存在そのものが、霊運に仏教への目を見開かせるのです。現に残る作品は、実際に作った何分の一かでしょうから、それですべてを測ることはできませんが、「仏影銘」「廬山慧遠法師誄」「諸道人と宗を弁ずる論」「范光禄の祇顕像賛に和する三首」「従弟恵連の無量寿頌に和す」「范光禄の書に答う」「維摩詰経中十喩賛八首」「曇隆法師誄」「金剛般若経注」はいずれも仏教に関する文で、かれの現存散文のなかばを占め、「金剛般若経注」は断片ですが、全部が残っていたらかなりの分量だったでしょう。道家ないし道教にかかわるものは「逸民賦」「入道至人賦」王子晋賛」「羅浮山賦」くらいで、道士の家に育ったから道士に知り合いも多かったろうに、かれらへの手紙も、誄の一首も見あたらぬことが対称的です。仏教徒の側でかれの作品を大切に保存したためでもありましょうが、それなら、利益になるものなら何でも取り込んでおのれのものとする道教の側で、かれの作品を保存してこなかったのが、理解しにくくなります。

五世紀の半ばから六世紀にかけての批評家劉勰（りゅうきょう）が、宋代初期の文学の特色を、

荘老は退を告げ、而して山水まさに滋（しげ）し。

といっています。前の時代の晋朝の文学には荘子や老子の哲学、道家や道教の影響が濃厚だったが、劉裕が朝廷をひらいた宋代に入るとそれらが衰え、代って山水を対象とし描写する詩や遊記の文学が盛んになった、というのです。そうしてこれを代表する文学者が謝霊運なのです。くだって唐代の詩人、楽天・白居易が「謝霊運の詩

を読む」という詩に、

謝どのの才能はガラッと大きく／世間の流れとうまく合わない／荘志も欝して使われなければ／洩らすところがなければならぬ／洩らしてつくった山水の詩／秀逸の韻は奇趣と諧和し／大は天から海までふくめ／小を描いて草木もあまさぬ／風物を玩弄するだけでなく／そこに真情をのべようとした／

とうたうのは、謝霊運文学の特色をうまく言い当てています。

ところで、かれ以前にも山水が描かれ歌われたこともあるのに、かれの山水詩や遊記のどこがこの時代の文学の新しさとされたのでしょうか。四二五年、四十一歳の霊運は、故郷の会稽始寧で隠居しているのですが、この前後に「山居賦」を作り、序文に次のように言っています。

揚子雲がいう「詩人の賦は豊麗で法則がある」と。表現と対象の両面にあわせて美を完成すべきだというのである。ところがいま賦するのは、首都の宮殿楼観でもなければ、遊猟や音楽や美色の盛大でもない。山や野、草や木、水や石、五穀や耕作のこと、筆者は才能において昔の人より乏しく、心を世俗の外に放っている者だ。文章表現には法則に従うよう努めはしたものの、豊麗の追求という点でははるかに隔ったものである。ごらんになる方が、文士の艶辞を廃し、隠者の深意を尋ね、虚飾を退け素朴を取られるならば、この賦の真情を理解されるだろう。

つづく本文を読むと、漢代の張衡や左思の作品が大都会の宮殿楼観や王侯貴族の遊猟宴会を取り上げるのに較べて、描く対象は「序」にいうように山野草木だから地味で、表現もまずは素朴です。山川草木を取り上げる作

品が、かれの前にないわけではなく、晋の孫綽の「天台山の賦」はその一例ですが、みずから天台山に登って実際に見聞きしたものを描写したのではないのです。これに対し、謝霊運は実体験からその対象を具体的に描くので、それがこの作品の決定的な新しさです。とはいえこれも四六駢麗体の賦ですから、かなりこってりした形式主義の文章です。「序」にいう「虚飾を退け素朴をとれば」見えてくるべき「真情」は霊運の文章上の理想をかたっているのですが、かんじんの「山居賦」ではその理想が十分には実現していない。賦という文体そのものが素朴純真から遠いのです。断片しか残っていない「遊名山志」が、むしろかれの理想に近いでしょう。そうして「遊名山志」は、慧遠の廬山諸記のある部分にそっくりです。謝霊運の文章の理想は、つまりは、慧遠の廬山諸記に胚胎することを物語るあかしというべきでしょう。慧遠の遊記の散文の新鮮さに驚き、奪胎するのに賦という旧式文体をとりあげたのは、文章家としての謝霊運の失敗です。その失敗を十二分に補って新分野を開拓しえたのが「山水詩」です。とはいえこれも、慧遠の詩と仏教学に啓発されたものというべきでしょう。その話に入るまえにかれの詩をすこし挙げておきましょう。

田南樹園激流植援　田の南に園を開き流れを引き生垣をつくった
樵隠俱在山　きこりも　隠者も　ともに山に住み
由来事不同　もとより　なすことは同じでない
不同非一事　同じでないのは一事にかぎらぬ
養痾亦園中　病いの保養も　また園で

中園屏紛雑　園では　世間の煩いを避け
清曠招遠風　さやかに　とおい風をまねく
卜室倚北阜　庵は　北山よりの地に結び
啓扉面南江　扉ひらけば　正面に　南の大河
激澗代汲井　谷間の早瀬を　汲み井に代え
挿槿当列墉　むくげを植えて　生け垣とした
羣木既羅戸　木立ちは群れて　戸口につらなり
衆山亦当窗　あまたの山が　窓べに聳える
靡迤趨下田　うねうね　下田をさまよい
迢遞瞰高峯　はるばる　高峰を見はるかす
寡欲不期労　欲すくなくて　疲れることなく
即事罕人功　物事に　めったに人手も借りない
唯開蔣生径　蔣元卿が　二人の青年に訪問を許した
永懐求羊蹤　あの高尚な友情が　したわしい
賞心不可忘　めでる心を忘れるまでにはゆかないが
妙善冀能同　すべては同じという境地に達したいもの

万歩計

1992 05 23　原田　慶

体力がなくなって疲れやすい。運動が足りないのだろうと思って、いろいろなことをしてみるけれどどれも続かない。「あんたは思いたってするのはいいが、その時だけで、やめたらすっかり忘れてしまうからあかん」といつも言われる。忘れるわけではないけれど、しなければならない事が多すぎて時間が足りない。縄跳びは冬だけ何年か続けたけれど、膝がうずき、足の指が痛くなってやめてしまった。手の運動にと思ってピアノを弾いたけれど、これはつい長い時間してしまうから続かない。庭をぐるぐる走っていたけれど木が繁って走る隙間がなくなった。何か特別に時間をかけないで生活の中で運動する方法がないかと考えた。そして思い出したのが万歩計だった。一日に一万歩あるくのを目標にするとよいといわれる。

この万歩計は亡くなった千代さんの形見だった。この人は乳ガンの手術をしてから後、太りすぎてはいけないとお医者さんにやかましく言われて、万歩計をつけて歩いていた。市内ならどこへ行くにもバスに乗らずに歩いた。わたしもつきあって歩いたことがあるけれど、たとえば池の坊の華展が、そのビルと高島屋百貨店の両方で開かれていたときに、自分の家からわたしのところまで二十五分ほど歩き、わたしといっしょに、御所の苑内を通り抜けて池の坊まで四十分、そこで二時間あまり生け花を見て、お茶席で少し休み、そこから百貨店に行ってまた生け花を見てそのまま歩いて家まで帰る。それくらい歩いて一万歩だったのだろうか。千代さんは毎日、歩くことが生きるためのたたかいだった。仁和寺の方で書道を習っていて、そこから京都駅に近い七条までも歩いたと聞いたことがある。二時間近くかかったのではないだろうか。

千代さんの万歩計を、わたしがめずらしがって見ていたので、少し調子がよくなった頃に彼女がヨーロッパ旅

行にゆくことになり、その間、万歩計をわたしに貸してくれた。さっそく使ってみたが、歩く度に針が動くものだと思っていたのに少しも進まないから、どうするのかわからなくて、そのまま置いていた。千代さんが帰ってきた時に返そうと思ったら、形見にあげるからと言って受け取らなかった。初めからそのつもりだったのかもしれない。もらってから、いつか使い方を調べてみようと思って引き出しに入れておいた。そのうちに千代さんは肝臓までガンが転移して入退院を繰り返し、亡くなった。

歩くこともそれを目的にすると、続きそうにないが、毎日、どのくらい歩いているかを知るだけでよいと思って万歩計をつけてみた。ためしてみてこの針の進み方がわかった。万歩計は直径が三センチ五ミリの円形の時計のようなもので、目盛りが刻んであるが、一ばん小さな目盛が百歩を表わしている。一千歩ごとに1・2・3・・・0までつけてあり、針が一周すると一万歩になる。一歩ごとに針は動かないのだった。毎日、夜になってからはずして、一日の歩数を見る。雨の日など家にいると、三千から四千歩しか歩いていない。晴れた日に、自転車に乗らないようにして歩くと七千歩くらいになることもある。平均して、一日に五千歩というところだろうか。歩くだけが運動ではないけれど、これを見ていると、その日にしたことがわかる。ずいぶん歩いたつもりでも一万歩になることは少ない。

わたしはよく滋賀県の母の所へ行くけれど、その時も万歩計を着けて行く。バスや電車を乗り継いで行くので、遠くまで行ったわりには、それほど歩いていない。先日も母の所へ行った。電車で石山まで行ってバスに乗りかえると、二十分ほどで母の家のすぐ近くに止まる。わたしの子どもの頃には一時間余りかかって歩いて越えた山道をバスでさっと通り抜ける。その頃は峠も今より高くて、急な坂では目の前に道だけしか見えなかった。中学校を卒業する頃になって、日に三度ほどバスが来るようになったが、雪が降るとスリップするのでバスは来なかっ

た。高校受験の日にたくさん雪が積もって、乗る予定だったバスが止まった。わたしたち受験生四人が、先生につきそわれて朝早く出発した。わたしは足のつけねまですっぽり入る父の長靴をはいて、歩いて山を越えた。受験のことに一生懸命だったから、長靴のことは気にしていなかったけれど、入学したあとで、他の中学校から来た人が、その時のことを憶えていた。「あんたの長靴をみんなで笑っていたら、先生が『ああいう人がかしこいんやぞ』と言わはった」と話してくれた。それまで長靴のことはすっかり忘れていたが、笑った生徒たちにとりなして下さった先生に大いに感謝した。

今では峠がだいぶ低くけずられ、道も舗装されて、両側は山の姿を保ってはいるが、少し奥はゴルフ場になっているらしい。みんな自家用車かバスで行くので、この道を歩いている人はいない。小学校の子どもも、少し遠いところからの者は、バスで通っている。

向こうに着いて、母の用事で農協へ行った。いつもなら自転車で行くのだけれど、やっぱり歩いて行くことにする。以前は村だったのが今では呼び方が町になっているので、母のところが中野町、農協や学校のあるところが隣りの平野町ということになる。農協はもとあった所から少し上のほうの、自動車道の十字路の一角に建っている。うす紫色のめずらしいビルなので、外からつくづく眺めてみた。何となく風景にそぐわない色だという気がする。中に入ると銀行のように高いカウンターがあって中に係の人がいる。ログハウス調の待ち合い室にはテレビがあり、お茶は自由に飲めるようにおいてある。待ち合い室の前面が全体にガラス張りになっているので外の景色はすっかり見える。横向きに走っているのが石山の方へ通じる道、縦に通っているのは、草津市の方へ行く道で、こちらの山は以前からそれほど急な坂道ではなかった。山を越えると柿や梨や葡萄の果樹園の村があり、そこを通り抜けると溜め池や田畑の続く農村がある。そこを通って行くとやっと草津という、昔の宿場町に着く。

こちらの方が、むしろだらだらと町まで遠いので、草津へはあまり出なかった。それでも年末の市がたつ日には何度か妹たちと行った。モールという色とりどりのフェルトをつけたやわらかい針金が買いたかったというほどのことだけれど、二時間くらい歩かなければならなかったので、市で居合抜きを見たり、蝮の牙から毒の液の出るのを見せて、その蛇を売っているのを見て逃げ出したりして遊びすぎると、短い日はすぐ暮れそうになる。くたびれて町はずれに座りこんでいるうちに、山を越えて帰らなければならないことを思い出し、妹たちを急がせて走ったり歩いたり、なだめすかして家にたどり着いた。まるで水に浮かぶアメンボのように頼りなくて、思い出すと寂しくなる。そんな山道も今では工場や団地になり、山というほどのものではなくなった。そんなことを思い出しているうちにカウンターの中から名前を呼ばれて立ち上がる。

農協の用事をすませて、学校の近くの文房具屋さんへ行った。そこで、母が作った折り紙の折り見本を、母が頼まれた人に渡してもらうようにことづけておいて、隣りの食料品店に寄って少し買い物をした。そのまま、自動車道の下の水田の中の道を歩いて帰る。この道もアスファルトが敷かれて田の仕事をするための自動車が通りやすいようになっているが、もとはクローバーを敷きつめたような野道だった。食料の乏しかった頃、お弁当を持たない子どもは、お昼になると、この道を走って家に帰り、お粥を飲んでまた学校へもどった。だんだんと誰が早く引き返してくるか競争になり、往復を運動会のようにみんな全速力で走った。

田の道を過ぎて自動車道へ上がってくる。以前は、道を渡ってから用水路があり、その土手がずっと竹やぶになっていたので、村はかくれていたが、今では竹やぶを除いてそこに道路をつけ、用水路が反対側にきちんとブロックを積んで整備されたので、町はおおいをとりはらわれてすっかり姿を見せている。家々はまわりを片付け、庭に花木を植えたりして美しくしたので、町がずいぶん垢抜けして見える。しかし、これだけ歩いても不思議な

ほど町の人に逢わない。年寄りは家の中に居て、元気な人はみんな、どこかの工場などに働きに行っているせいらしい。この土地では、昔から用事もないのに散歩したりするなどは考えることもできないし、元気だのに、働きに出ないで家に居るのはふつうの人ではないと思われる。そのような風習はまだ根強くて、みんなどこかへ働きに行く。わたしは学校を卒業してすぐ勤める所がなかったので、母の仕事を手伝っていたら、親るいの人に、「お前は大学まで行って百姓をしているのか」と笑われた。短大を出たばっかりにじっとしていられなくなったのかなあと思ったりするが、何につけても考えのたりないことばかりしてきた。

その日の用事をすまして、午後四時頃に帰りのバスを待っていた。停留所のすぐ近くに新しい信号機が立っている。押しボタン式だが信号の変わるのを待っている間に渡れるから、わたしは使ったことがない。そこに立って町の方を見ていてもまだ人影がない。もうすぐみんなが家に帰ってくる頃だろう。反対を向くと水田が広がっていて、こちらにも人の姿はないが、その向こうに深々と緑の山が巡っている。ふもとの神社のあたりはシイの木に花が咲いて、うすい黄色が盛り上がっている。この山は、奈良の都を建てるために木が切り出されたということで、山膚がむき出しになりずっと風化するにまかされていた。大きな岩も砂にくだけ、かぜにさらさらと流れて谷を埋めていた。何度もこの山の尾根を伝って、父の後について小走りに奥山の不動尊へお参りした。よい水晶の出ることで知られた田上山で、このあたりを六ケ山という。戦争の後、失業対策や村の人の副収入を支える意味もあって植林作業が行なわれ、今ではすっかり緑の山になっている。赤い砂山が緑に変わるまで、それほど長くわたしはこの山を見てきた。いつもここに立って山を見ると何ともいえず嬉しくなる。そして小学校の校歌を思い出す。

清き流れの大戸川

秀でて高し六ケ山
その山の霊　水の精
凝りてぞなれる我が郷里

この小学校には四年生の終りに帰ってきたので二年あまりしか通っていないけれど、校歌というのがわたしの中に残ったのはこの歌だけだった。このむつかしい歌を、今の小学生も歌っているのだろうか。

緑色濃き御山には
神代ながらの富つつみ
肥えたる広き平野には
永久に美穀の名をとどむ

おいしいと歌われた米は、少し味が落ちたかもしれない。農業にあまり力を入れているようには見えないからである。

父が愛した郷里をわたしもいつの間にか懐かしむようになった。「ふるさとの山に向かいて言うことなし・・・」という気持になる。わたしも年をとったらしい、生かして頂いたとしみじみ思う。

バスが来ると学校帰りの子どもたちがたくさん乗っていてさわいでいたが、山に入るまでにみんな降りてバスの中は静かになった。堂町の停留所を過ぎて、若宮八幡宮の横を通る頃から山に入り瀬田に出て唐橋を渡る。六ケ山の次になつかしいのがこの唐橋から瀬田川の眺めである。

朝、家を出る時につけた万歩計は、帰ってから見ると九千二百歩を指していた。一万歩にはまだ足りない。万歩計をじっと見ていたら「千代さん、あんたはほんまによう歩いたなあ」とまた彼女を思い出した。